Teaching in the Art Museum: Interpretation as Experience（Partial）

by Rika Burnham, Elliott Kai-kee

翻訳：崎本由美　監訳及び注釈：上野行一

1990 年代前半、ヤナワインとハウゼンは、クラス担任教師がその生徒たちに美術作品に関するディスカッションへの導入を行うための、連続的カリキュラムを共同開発した。彼らの開発したカリキュラムは、ビジュアル・シンキング・ストラテジー（VTS）と呼ばれる手法に発展し、その手法は、教室のみならず美術館においても、徐々に採用されていった。VTS の発展は、当時の教育的動向を完全に反映したものだった。VTS の開発者たちは、ジャン・ピアジェやレフ・ヴィゴツキーを引き合いに出し、構成主義の複雑さを、実践的カリキュラムに転化する方法を提案した。VTS は、生徒たち自身の力に委ねつつ、美術作品に対する彼ら自身の解釈を深められるようなディスカッションを、教師が円滑にまわしていけるように、3 つのシンプルな問いかけを規定した。

VTS の論文は、教育者たちに、決して情報や意見の源を与えないよう助言した。ヤナワインの説明によると、彼が教えたプロセスでは、「周辺情報」と呼ばれるものを除外していた。たとえば、作家の人生、対象がどのようにしてつくられたか、様式的含意、特定の象徴的意味といった情報さえ除外していたのである。彼は情報を否定しているのではないと断言したが、「まず見ることから始める」という美術との関わり方を強調した上で、教育において美術作品を説明してしまうと、「積極的に見ずに、受動的に受容することを教えることになる」と主張した。

多くの年配の、より経験のあるドーセント（ガイド）たちは、その新しい美術館教育手法に反発した。彼らは伝統的な教育概念に慣れており、また、従前の美術館教育制度を経験しており、その制度のもとで、学芸員たちの権威ある知恵を大衆に伝えるよう指導されてきた。彼らが丁寧にボランティアガイドをしていたのは、ときに、学芸員の専門知識に特権的に近づくためでもあった。専門家になること自体が、少なくともある程度は、ガイドとして働くための主要な動機であった。さらに、美術館教育者たち自身も、美術館教育において必要な改革と向上を満場一致で是認するというわけではなく、昔からのガイドたちの多くは、異なる考えによるガイドコーディネーターの変化によって、振り回されていた。

来館者たちにおいても、誰もが情報を除外する準備ができていたわけではなかった。ゲッティー美術教育センターと J・ポール・ゲッティー美術館の後援を受けて行われ、1991 年に発表された来館者の姿勢及び期待に関する集中的なグループ研究は、総合して、「情報は美術の評価を高める。特定の対象とその背景について、来館者たちが知れば知るほど、その対象との関

係は強くなる」という結果を示した。

1991 年全国ガイドシンポジウムでのハンドブックの著者たちが述べているように、個人的経験と情報は、相互排他的なものではない。「それらは、来館者たちにとっての意味を、協力してつくり出すものである」と述べている。ダニエル・ライスは、学習には、分析と来館者側における物語の構築が不可欠であることに同意した上で、見る者の最初の反応と、「事実の広大な領域から引き出した、慎重に選択された情報」を組み合わせた「情報層化手法」を提唱した。情報の最善の利用法は、「見る者の、美術作品に対する自然な反応を強化し、強調することである」と彼女は考えた。

解釈のプロセスを来館者に委ねることは、美術史家や批評家、学芸員、美術館講師の見方を必然的に脇へ追いやるものなのだろうか。1998 年、明らかに VTS に対して、ダニエル・ライスはこうコメントした。近年の美術館教育における課題の一つは、「いかなる意味合いも、他のどれかに優越することがないよう保持されたことによる、相対主義の蔓延である」と。美術との思慮深い関わりを促すかもしれないが、同時に「知識的観点を構成する、広く同意を得られた理解について、実際に来館者たちに教育する責任を放棄しようとする」美術館教育者に誤用される可能性もある手法に対して、彼女は警告を発したのである。

相対主義に関するライスの警告に、アイリーン・フーパー・グリーンヒルが同調した。彼女は、解釈的行為そのものは、隔絶された個人の行為ではなく、個人とコミュニティ双方の産物であると指摘した。「個人的解釈は、社会的かつ文化的枠組みの中で形成される」と述べた。

最近では、シェリル・メサローシュが、個人的解釈が優位に立つべきであるという考えを、「なんでもいい解釈」と呼んだ。彼女は、美術館が文化的に共有された、もしくは受容された知識をないがしろにすることで、個人の経験的知識を優先するという傾向に反対した。当然、私たちはそれぞれ世界との交流の中で意味を形成していくが、「受容した思想や言語から隔絶した形で、そうした行為を行うことはありえない」と彼女は指摘した。

ビジュアル・シンキング・ストラテジー（VTS）と呼ばれるもう一つの手法は、「美術を活用して、生徒たちの観察し考え、聴き、交流する能力を養い」、「批判的思考法、コミュニケーション、及び視覚リテラシー能力の開発を」約束する。その手法の中核的ツールは、規定された 3 つの問いかけである。

この絵では何が起きていますか。

何を見てそう思いますか。

他に何が見つかりますか。

以上の 3 つである。VTS 教育を受けた美術館教育者たちの問いかけは、これら 3 つだけに制限されている。彼らはまた、うまく議論をまわすために 3 つのテクニックを用いる。彼らは

「コメントを中立的に言い換え」、「（美術作品の）議論されている領域を指し示し」、「対照的なコメントと、補完的なコメントを結び付ける」が、いかなる情報も提供せず、生徒たちの誤解も修正せず、自身のコメントを加えることもしない。

以下のセッションは、ニューヨークのアメリカン・フォークアート美術館でのVTS「専門能力開発講習会」のビデオを、書き起こしたものである。

ビデオでは、VTS教育受講者のグループが「ジャマイカ山に登るシモン・ボリバル」（1983）について対話している。ジャマイカの美術家エベラルド・ブラウン（1917-2002）によって、熱狂的なフォークアートのスタイルで描かれた、偉大な南米の指導者の象徴的肖像画である。（実習の指導者は、決してその絵のタイトルも、作家の名前もグループには教えない）。

ブラウンの絵では、ボリバルはジャマイカ島全体をまたぐ巨大な人物として描かれており、同様に巨大な果物や野菜に囲まれ、その自然の恵みは、南米の「El Libertador エル・リベルタドル」へと注がれている。講習の指導者は、標準的なVTS式の問いかけから始める。「この絵では何が起きていますか」と。指導者は受講者からはじめにいくつかの発言を聞いた後、それを要約する。

エベラルド・ブラウン〈ジャマイカ山に登るシモン・ボリバル〉（1983）
caribbeancivilisation.tumblr.com より

指導者：オーケー、では、あなたはトウモロコシが気になったのですね。これらは全て、私たちの知っている植物です。それであなたは、この男性が征服者かもしれないと思ったのですね。何を見てそう思いましたか。

アナ：男性の服装です。その気候から考えて、熱帯の島で暮らす原住民としてはふさわしくない服装です。たくさん着込んでいますし。ジャケットと、高い乗馬靴と帽子を身につけていますが、あまり似合っていません。

指導者：オーケー、では彼の服装のスタイルが、彼のいる風景に、ちょっとそぐわないと思うのですね。彼の服装は少し――、着込み過ぎているので、おそらく彼は他の場所から来た人で、彼は何らかの方法でこの島を征服しに来たと考えるのですね。オーケー、他に何が見つかりますか。はい。トレイシー。

トレイシー：彼の右手にあるペッパーのようなものが、剣のように握られているようにも見えます。彼は征服者か、あるいは何かよくないことをしに来た人であると、暗示しているのかもしれません。

指導者：では、剣を握っているように見えるというのは、何を見てそう思いますか。

トレイシー：その持ち方です。真直ぐに持って、――それで人か物を殴ろうとしている　かのように向けています。

指導者：オーケー、では、彼の身体は前に動こうとする構えのように見えると。

トレイシー：攻撃の構えです。

指導者：つまり、彼はこのペッパーを、ある種の武器として握っているように見えると。

トレイシー：そうです。

指導者：彼がいる島にとって、良い予感のしないものですね。

トレイシー：そのようですね。

指導者：オーケー、ありがとう。ステファニー、他に何が見つかりますか。

このセッションにおける受講者は、明らかにその絵に注意を惹かれていて、彼らはそれをよく観察している。セッションが進むにつれて、彼らは作家に対する自らの理解を基に、キャンバス上の中心人物と、その人物が立つ島の人々との関係について、さまざまに相反する解釈を唱えるようになった。たとえば、「救済者」、平和や希望、あるいは「プロパガンダ」のメッセージをもたらす者、「食糧を供給する者」、「自らの資源を用いて彼らを支配するような搾取者」などである。

指導者は、セッション中ずっと、正確な要約を提供し、受講者のコメントを言い換える。受講者の誰かが、絵の何らかの要素を誤解したときでさえ―（例えば）ボリバルが帽子をかぶっていると言ったり（実際にはかぶっていない）、ボリバルが左手に抱えているココナッツを、フットボールもしくは爆弾と見たり、ボリバルに「足が無い」と見たり―そして、それに基づいて解釈を構築するときでさえ、指導者は、彼らの間違いを正すことや、再考するよう指示することさえしないし、できないのである。

ブラウンが描き上げた図像は、複雑さに富んでいる。アメリカン・フォークアート美術館に

よる、ウェブサイト上での作品解説によると、「雄鶏が将軍の耳に向かって鳴いている。雄鶏が運ぶ（解放か、それとも自由の）メッセージは、ボリバルの頭を通って黄色い雲状の形で絵の右側に向かい、もう一つの陸地、アフリカ西海岸に着陸する。当時植民地化され、抑圧されていた国々の地域である」。受講者の二人は、この形状がいかにして作品の構成を「まとめている」か、また、作品を読み解く鍵になりそうか、ということに注目している。しかし、このグループは、決してその「島」がジャマイカとアフリカであることに気づかないし、中央の人物がボリバルであることにも気づかない。そして、このような決定的事実を知ることなしには、彼らの解釈プロセスは、堂々巡りになる傾向がある。

受講者：アナが、果物と野菜と彼女が見たものについて論じていたとき、私は、彼が手に持っているように見えるチリ・ペッパーに目が行きました。彼は、その資源を利用して、島の人々を支配しているように見えます。

指導者：オーケー、私たちは、ペッパーを持った彼のある種の振る舞いについて、すでに話しました。なんと言い換えましょうか…。彼は、島の資源を取っているように見えます。ここの人々にとって、有用だったものです。そして、何らかの形で、島の人々を支配するためにそれを用いています。

受講者：確かに。ナイフのように見えます。その持ち方からして。

指導者：オーケー、では、あなたは、それが暴力的な行為のように見えるということですね。

受講者：そうです。

指導者：オーケー、どうもありがとう、素晴らしいセッションでした。

何が VTS セッションを「素晴らしく」するのだろうと、疑問に思うだろう。シモン・ボリバルは、決してジャマイカを侵略したことはなかった。＊　彼はそこで少しの間隠れ家を探し、1814 年から 1815 年の間、その島で亡命生活を送ったのである。コロンビアで、スペインの植民地支配の軍勢を打倒することに成功した後のことであった。

指導者は―VTS 式テクニックの制限に従って―その絵画の歴史的あるいは文化的文脈を―タイトルさえも―説明することをしないし、許可されていないので、見る者は、決してその作品を真に把握することはできない。ブラウンの絵のように、独特な図像構成に基づいた美術作品は、確かに力学的、教育学的手法をそれほど要求しない。このグループが、その作品の主題さえ全く把握できないのであれば、この美術作品との出会いから、何を「**得た**」のだろうか。彼らは本当にそれを**見た**と言えるのだろうか。彼らは、もしかしたら、その絵画との本当の出会いを、**騙し取られて**はいないのだろうか。

VTS によって要求される 3 つの問いかけと同様に、結論の出ない質問が、美術作品に関するオープンで「民主的な」会話を生み出すようにつくられているように思える。しかし、指導者

の制限、VTS が定めた３つの問いかけの使用、言い換え、作品に関する情報の遮断といった制限は、指導者が、生徒たちの理解を助ける能力を、厳しく制限するやり方になっている。このエピソードの参加者たちは、ブラウンの絵画に関して自身の誤った結論に達するしかない。大きく逸脱した会話を導くような、制限された手段を、美術館教育者にとらせるいかなる方法にも、私たちはしっかりと疑問を抱かなくてはならない。特に、その結果に何の責任も生じないような方法には。

＊訳注：シモン・ボリバルはペルーやコロンビア等スペイン領の独立に関わった南米開放の英雄である。彼の名はボリビアの国名の由来ともなった。2013 年の伝記映画《Libertador》（邦題：リベレイター 南米一の英雄 シモン・ボリバル）は、ベネズエラ・スペインが共同製作した映画である。リベレイターは「解放者」の意味であり、題名にはラテン・アメリカにおける独立戦争の英雄としてのオマージュが捧げられている。

アメリカン・フォークアート美術館での VTS「専門能力開発講習会」の様子。
VTS discussion with adults
http://www.vtshome.org/pages/a-vts-discussion#discussion
（なお、この VTR は現在削除されている）

（著者紹介）
Rika Burnham（リカ・バーナム）
アメリカにおける美術館教育の第一人者です。コロンビア大学講師。ニューヨークのフリック・コレクションで教育責任者を務め、シカゴ美術館付属美術大学で美術館教育者教育研究所/ TIME のプロジェクトディレクターを務めています。過去にはメトロポリタン美術館の美術館教育者、コロンビア大学のティーチャーズカレッジの非常勤教授でした。彼女がエリオット・カイ・キーと共著した”Teaching in the Art Museum: Interpretation as Experience”（Getty, 2011 年、本資料は同書の抄訳）は、アメリカ出版協会から教育の最高のタイトルである PROSE 賞を受賞しました。バーナムは、2014 年にマサチューセッツ芸術大学から名誉美術博士号を授与されました。

（コロンビア大学公式サイトより）

Elliott Kai-kee（エリオット　カイ・キー）
J.ポール・ゲティ美術館で教育部門ギャラリー・ティーチャーのスーパーバイザーに就いています。カリフォルニア大学バークレー校でヨーロッパ史の博士号取得。学校や大学の教師育成プログラムやインターンのプログラムを作成してきました。